はせしことあきらかなり、こゝに引中務集は、倭學講談所藏古抄本なり、他本には、きくのわたにておもてのごふ女と有、九日に、花咲あへぬ年は、綿を菊の花のかたにつくりて、八日の夕に菊にきせ置、露に玄めりたるを九日にとりて、其綿にて身をのごひて、齡をのべ、おいをのごひすて、若がへるなどいふまじなひにせるよしなり、伊勢集、忠見集、紫式部日記、清少納言枕草紙、新撰六帖、辨内侍日記等に見えたり、然るを近代は、霜をいとふ故といふ說もあるはあやまりなり、

〔嬉遊笑覽十二草木〕菊のきせ綿も、香をめづるより起れり、○中略散木集、九月九日菊してかほなでよと人の申ければ、ちるごとく玄ぼめるかほは花なればなづとも菊の玄るしあらめや、○中略新撰六帖、信實垣根なる菊のきせ綿けさみればまだき盛の花咲にけり、時過てたれかは今もきせわたのそれかと匂ふ露の玄らぎく、○中略隣女晤言に、溪雲問答に、通茂公の歌を出して、咲きくはまたむら〳〵の籬をも花につくろふけふのきせ綿とあそばせるは、花とみせんとてのことにやといへり、これは新撰六帖に信實垣なるきくのきせ綿云々とあるより、花の咲ざる程、綿を花とみせむとてのことのやうに思ひ給ふなるべし、但し通茂公は、定基卿の尊父にて、有職の人におはしませば、猶古書などに見したゝめ給ふ事あるべし、今按ずるに、信實の歌も、花と見せむとて綿を著るにあらず、香を移す爲なれば、半開の花にもきするなるべし、通茂公の歌も亦しかなり、何の不審かあらむ、世諺問答に、霜をさくる爲ならむとあるはいかゞ、もし霜をよけんとならば、花のうへのみにてはかなふまじ、又古人老をわかゆる撫ものとも、もてあつかひしも戲れごとなり、これ風俗通に、南陽郡酈縣有甘谷、谷水甘美、云其山上有大菊、落水、從山下流、得其滋液、谷中有三千餘家、不復穿井、悉飲此水、上壽百二三十、其中年亦七八十、ゆゑ長壽を得といひ、又魏文帝與鍾繇書に、九月九日、九爲陽數、而日月並應、俗宜其名以爲宜、於長久、故以燕享高會云々、屈平悲冉々之將老、思食秋菊之落英、輔體延年莫斯之貴、などあるによる事にて、重九を長久の義にとり、これらのわざもあるべ